

タケダ・ウェルビーイング・プログラム 2021 成果報告レポート

助成番号 21-1-4

プロジェクト名 コロナ禍に対応した院内活動プログラムの
開発と継続の仕組みづくり
団体名 特定非営利活動法人絵本カーニバル
所在地 東京都
助成額 200万円
設立年 1997年
URL <http://www.ehoncarnival.com/>



（団体について）

絵本カーニバルは絵本や音楽などを通じて、子どもの心と身体、感性と感覚の発達を促し、また地域や医療・教育機関と連携して子どもの健全な育成に寄与し、社会に貢献することを目的とした活動を行っています。

現在は主に、小児病棟やこども病院において、生活、日常、成長の場が病院となる長期療養する子どもたちやそのご家族に、絵本を媒介にしたコミュニケーションを通して「病棟生活が日常となることで不足する子どもの成長に必要な“体験”の支援」と、「子どもや保護者が感じる精神的な社会からの孤立に対する働きかけ」を行い、療養生活のQOLの向上、治療に向かう力への支援を行なっています。

（助成による活動と成果）

助成では、コロナ禍において様々な制約のある中でも弊団体の支援活動である医療機関での絵本を介した支援を受け入れていただけるよう、安全に配慮したプログラム開発と、その実施に伴う仕組みづくりを行い、実施を継続していくことと共に、活動の実績をもって、安全性を広め、より多くの医療機関に受け入れていただくことも目的としています。

実施に伴う仕組みづくりの一環としては、ボランティアの体験会を開催し、企業ボランティアや一般のボランティアの方にワークショップによるマテリアルの製作・加工を体験していただきながら、病院の現状や活動への理解を深めていただきました。

今回、コロナ禍に配慮した低学年向けのワークショップと小児病棟に入院する高い年齢層の子どもに向けた学習支援を兼ねたプログラムを作成し、弊団体の支援活動である医療機関での絵本展示と合わせて、6院の小児専門の医療センター、大学附属の小児病棟で実施を行うことができました。

実施においては、クラウド型のWeb会議システムを取り入れたオンラインでのワークショップを実施した医療機関もあり、病棟内のプレイルーム、院内学級とリアルタイムに映像をつなげ、説明をしたり、質問を受けたりしながらワークショップを行いました。

コロナ禍の様々な制約で子どもたちは傍に人がいても動画に充てる時間が増えている中、実施いただいた医療機関では娯楽としてはもちろん、親子での絵本タイムや就寝前の読み聞かせ、処置の際の気持ちの鎮静など、様々な絵本を活用いただき、この時期であるからこそ実施してよかったと評価をいただくことができました。

（残された課題、新たな課題）

現時点では、コロナ感染症の流行は減少傾向にあります。それでも、面会制限や一時帰宅、外出の中止、ボランティアの停止、外部からの立ち入り禁止を継続している医療機関は多く、「病棟から出られず、病院内の散歩すらできない」「季節のイベントがなくなり病棟生活に潤いがなくなった」という声も聞かれ、病棟生活に変化をもたらす支援をより多く提供していく必要性を感じています。

感染対策とオンライン活用として実施したオンラインワークショップでは参加者に喜んでいただき、十分に評価を得ることができましたが、実開催のように一人一人に目を配り、語りかけ、共感しながら、意欲を引き出していくようなコミュニケーションとは差異があるため、その差異をどう埋めていくか、もしくは新しいコミュニケーションで、より質の高い支援を行うためにどのようにするかを試行と評価が必要と思われます。

コロナ禍における子ども達のこころの状態の変化、精神的な問題や、コロナ発症の後遺症として、気分の変容、倦怠感などのあらたな問題も報告されており、この状況に団体でできることを考え、また周囲の理解促進なども新たな課題と考えています。

（活動の背景・社会的課題）（団体からのメッセージ）

コロナ禍、多くの医療機関で子どもと家族、双方の心の支えである面会や一時帰宅が制限されています。コロナの影響で手術の制限によって治療が遅れたり、治療において安静が必要な時に家族の付き添い制限で不安になることもあります。医療機関ではご家族への対応や患児をなだめるケアも必要となり、家族、患児、看護師に大きな負担となっています。

ボランティアの受け入れ停止や外部からの病棟への立ち入り制限もあり、院内イベントができないことを寂しがる声も多く聞かれます。

このようなコロナ禍に於ける医療機関の感染対策は、コロナが収束したとしても、その一部は日常的な感染対策として続いていくと思われるため、今後も安全な支援を考えて、継続して届けていきたいと考えています。